

近世の服飾語彙

— 浮世草子・洒落本を中心として —

堀井彩香

一、はじめに

遊里という特殊で狭小な世界を舞台として書かれた近世の洒落本には、当時「粋」とされた風俗が詳細に描かれている。

小春のころ柳ばしで三十四五の男。すこしあたまのはげた。大本多大びたい。八端がけと見る羽織に。幅の細き嶋の帯^{注1}むなだかに。細身のわきざし柄^{注2}まへ少しよこれ。黒羽二重の紋際もちとよこれし小袖。ある着は小紋無垢の。片袖ちがひのように見へ。いろのさめた緋縮緬のじゅばん。はきにくそふな。幅ひろのひく下駄。やまおか頭巾かた手に持。わきざし立派に黒縮緬の綿入羽織。

（『洒落本大成』第四卷 三四七頁）

洒落本の代表作、田舎老人多田爺作『遊子方言』（一七七〇年頃刊）の一文である。羽織・帯・脇差・小袖などといった衣装・

装身具類が挙げられ、読者に登場人物像を鮮明に思い描かせる。このような衣装や装身具類の詳細な記述から、当時の作者が衣装を重視していたことがうかがえる。洒落本については、既に彦坂佳宣氏が名詞の多さを特徴として挙げており、中でも衣装・装身具類が大半を占めていると指摘している。^{注1} また、洒落本における服飾描写については、小池三枝氏によっても論じられており、その一端が明らかにされつつある。^{注2}

本稿では、こうした研究を踏まえ、先行研究では十分論じられてこなかった、浮世草子と洒落本の服飾描写の比較を行いたい。また、流行の発信地である遊里を舞台として書かれた洒落本・浮世草子を研究資料として取り上げること、服飾語彙が作品に与える影響を探っていききたい。

二、調査方法

本稿では、近世文学作品における服飾描写の変遷を、江戸時代を三分し、文献を分析する。なお、区分については、服飾史における江戸時代の区分とし、菊池ひと美氏の『江戸衣装図鑑』(東京堂出版 二〇一一年)を参考にした。

初期：慶長から貞享まで(一五九六～一六八八年)

中期：元禄から天明まで(一六八八～一七八九年)

後期：寛政から慶応まで(一七八九～一八六八年)

この時代区分に基づいて、本稿では以下の作品を調査対象とした。

『新編日本古典文学全集』(小学館)、『洒落本大成』(中央公論新社)をもとに、目録と序文、跋文を除く本文から、注釈を参照しながら一語ずつ採録した。

【初期作品】浮世草子

井原西鶴 『好色一代男』(一六八二年)

【中期作品】洒落本八作品

白岡先生 『郭中奇譚』(一七六九年)

田舎老人多田爺 『遊子方言』(一七七〇年)

夢中散人寝言先生 『辰巳之園』(一七七〇年)

夢中山人 『南閨雜話』(一七七三年)

風鈴山人 『甲駅新話』(一七七五年)

田螺金魚 『傾城買指南所』(一七七八年)

山東京伝 『通言総籙』(一七八七年)

山東京伝 『古契三姐』(一七八七年)

【後期作品】洒落本八作品

山東京伝 『傾城買四十八手』(一七九〇年)

山東京伝 『繁千話』(一七九〇年)

山東京伝 『仕懸文庫』(一七九一年)

山東京伝 『錦之裏』(一七九一年)

鈴木成 『大通契語』(一八〇〇年)

十偏舎一九 『起承転合』(一八〇二年)

江南里遊 『夜告夢はなし』(一八三三年)

武木右衛門 『興斗月』(一八三六年)

服飾語彙の調査を進めていくうえで、本稿では、「服飾とは、衣装、被り物、履物、付属品からなるもの」と定義する。

基本的に右の定義をもとに、服飾語彙の採録を行うが、次の傍線部にある語彙のような場合には、採録の対象から除外することとする。

①人以外が身に着けているものは省く。

(例) 赤頭巾をきせたる臯)

② 服飾語彙を含んでいても、それが服飾を表さないものは省く。

(例) 草履取り…主人の草履を持つて伴をする下僕を指す)

(例) 墨染の水のみもあへず、…墨染寺を指す)

ただし、語彙が人物を指す場合でも、服飾を身に着けていると判断できるものは採録した。

(例) 羽織にしゃせうか、男芸者にしゃせうか…羽織芸者を指す)

③ におい(香)に関するものは省く。

④ 髪の写真は省く。

⑤ 用例ごとに本文にあたり、はっきりしないものは省く。

また、分類方法については、岡田芳恵氏の『宇津保物語』の服飾語彙について(『日本文学』八六号 一九九六年)の分類項目を参考に設定した。ただし、岡田氏は、「着用の姿」衣裳の計量」なども分類項目として認定しているが、本稿では該当する例を有しないことから除外する。

【服飾語彙の分類項目】

- ① 衣裳の一般呼称 着物・衣・寝巻
- ② 衣裳の名称 羽織・小袖・襦袢
- ③ 衣裳の部分の名称 袖・裾

④ 服飾の色彩 浅黄・藤色

⑤ 服飾の文様・図柄 縞・小紋・鹿の子

⑥ 織物の名称・材質 羽二重・縮緬・天鷲絨

⑦ 装身具類の名称 帯・下駄・笠・簪

⑧ 武具類の名称 脇差

⑨ その他 傘・巾着・紐

三、服飾語彙数から見た全体的様相

浮世草子と中期洒落本八作品、後期洒落本八作品の服飾語彙の語数を比較する。『好色一代男』、中期洒落本八作品、後期洒落本八作品では、文章量が異なる。その点で比較困難な面を有するが、今回は『好色一代男』が八巻構成であることを踏まえ、一巻一作品であると捉え、中期・後期洒落本八作品ずつとの比較を行いたい。比較の際には、文章量について、別途、加味して考えることとする。

服飾語彙全体延べ語数は、次の通りである。

- 『好色一代男』 四六一例
 - 中期洒落本 五九〇例
 - 後期洒落本 五九七例
- 後期洒落本が最も多い結果であった。これは、浮世草子以後、

遊里文学に服飾語彙を積極的に取り入れる風潮が広まっていたものと考えられる。

以下、具体例を見ていきたい。まず、『好色一代男』では、西鶴による細やかな人物の服飾描写が多く見られる。

その暮方に、色つくりたる女、肌には紅うこんのきぬ物、上にかちん染の布子、編織子の二つわり左の方に結び、赤前だれして、桐の引下駄をはきて、たばね牛房に花油などひきて…

(八四—九)

登場人物の装身具にもわたる細かな描写を作中に取り入れている点が特徴である。先学の暉峻康隆氏は、西鶴の詳細な人物描写について、「風俗画譜の様式」と称し、以下のように述べている。

新時代の訪れとともに発生した風俗画譜の様式にもとづくこの斬新なるファッション・シヨウの方法は、まさしく西鶴の獨創にかかはるものであり、しかも日本においてのみならず世界に先行する方法であり、かつ今なほ効果的な方法であることを失はない。^注

西鶴は、この細かな服飾描写によって当時の社会風俗を反映しつつ、生き生きとした人物描写を成功させたといえるだろう。この西鶴による「ファッション・シヨウ的方法」は、後に誕生する洒落本に大きな影響を及ぼし、この服飾描写を確立したのが、

『遊子方言』であると考えられる。

西鶴によって成功を収めた詳細な服飾描写は、後の遊里文学に受け継がれ、積極的に取り入れられることになった。これにより、中期・後期洒落本にかけて服飾語彙の用例数も増加していたものと考えられるだろう。

もつとも、語彙の種類については、単純に増加していったわけではなさそうである。異なり語数は次の結果であった。

『好色一代男』 二二〇例

中期洒落本 二〇五例

後期洒落本 二〇二例

全体の文章量を加味して考えても、浮世草子以降、減少していることがわかる。この要因として考えられることは、衣服そのものに對する規制、風潮の変化との関係である。『好色一代男』の刊行された江戸初期は、衣服の禁令がない自由さがあり、大規模な贅沢な織物を用いた派手な服飾が好まれた時期であった。つまり、自由であったことにより、多種多様な服飾語彙が抽出できたと考えられる。

それに対し、中期・後期洒落本の時期は質素儉約の風潮により自由が制限され、皆が一樣に地味な衣服を好んだとされている。この風潮が異なり語数に関係しているといえる。

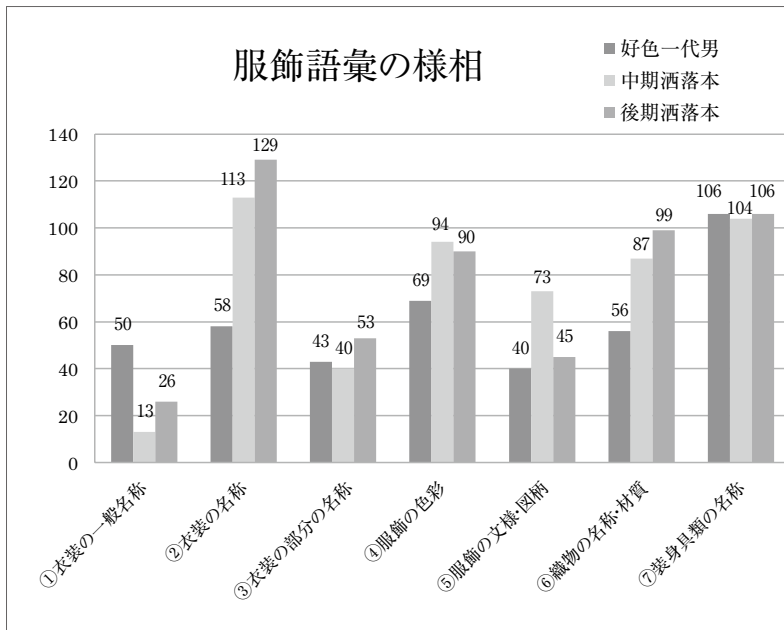
四、各項目における語数比較

ここでは、九つに分類した項目ごとの語数比較を行っていく。

『好色一代男』では「⑦装身具類の名称」一〇六例「④服飾の色彩」六九例「③衣装の名称」五八例、中期洒落本では「②衣装の名称」一一三例「⑦装身具類の名称」一〇四例「④服飾の色彩」九四例、後期洒落本では「②衣装の名称」一二九例「⑦装身具類の名称」一〇六例「⑥織物の名称」九九例の順に多い。

『好色一代男』で最も語数が多かった「⑦装身具類の名称」は、『好色一代男』では全体の二二％を占めているのに対し、中期洒落本では「②衣装の名称」について一八％、後期洒落本も同様に「②衣装の名称」について一八％という結果であった。中期・後期洒落本ではほぼ同じ割合で使用されていることがわかる。服飾語彙全体の延べ語数の中で、どの作品においても、「⑦装身具類の名称」が多く使用されていたといえる。

「装身具」というものは登場人物一人につき一つというものではない。帯や被り物、下駄など服飾描写には欠かすことができないものを多く含んだ項目であるために、その割合が多いのは必然である。さらに、装身具というのとは概して着脱が容易なものばかりである。作品内でも、「帯をしめる・とく」「笠をかぶる」「下駄



をはく・そろえる」など服飾描写に限らず、登場人物の行動描写にも使用されることが多かった。これにより、近世遊里文学において「⑦装身具類の名称」が多く採録されたと考えられる。

『好色一代男』では、多くの装身具の記述がなされており、例えば、女性の腰巻を表現するために「脚布」「二布」「隠し道具」「腰絹」「腰より下の一重」など多くの語彙を使い分けていた。腰巻一つに対しても細かな描写を施そうとする西鶴の意識がうかがえる。

『好色一代男』における「②衣装の名称」「⑦装身具類の名称」を修飾する語彙を調査したところ、「②衣装の名称」には四〇例、「⑦装身具類の名称」には一九例の色彩語が使用されていることがわかった。（表1参照）衣装の名称を修飾する語で最も多く使用されているのが「④服飾の色彩」なのである。

この点、大平雅美氏は、「宝暦期から天保期（一七五一—一八四三年）に発刊された洒落本作品、約六五〇編から男女問わず服飾の色彩記述を抽出した。その結果、小袖、羽織、帯などの衣類について色彩表現があるものは二四〇編を数え、全体の約四〇％弱の作品に衣類の色彩について記述があることが明らかとなった」と指摘している。浮世草子における衣服の修飾語で色彩語が最も多いという本稿の結果と大平氏の洒落本における服飾色彩の指摘を併せ考えてみると、浮世草子と洒落本共に多くの服飾

色彩語が使用されているといえる。

例えば、江戸中期に流行した服飾の特徴として「黒仕立」がある。『色道大鏡^{注5}』には、「無地の染色は、黒きを最上とす、……黒と茶色は幾度着しても目にたえず、みかけよろし。……わきて当道に用ゆるは、茶より黒を専とす」とあり、当時の人々は、織物や文様よりも「黒仕立」、つまりは色彩を第一に重視していたものと考えられる。よって、「②衣装の名称」「⑦装身具類の名称」に次いで、「④服飾の色彩」の語数が多いという結果は、当時の人々が服飾の色を強く意識していたことの表れであるともできよう。

表1 『好色一代男』における
服飾描写の様相

分類項目	衣装の名称	装身具類の名称
④服飾の色彩	40	19
⑤服飾の文様・図柄	23	3
⑥織物の名称・材質	22	23
状態	10	19
飾り・素材	4	13
計	99	77

※【衣装の名称】には、「①衣装の一般呼称」に分類した語彙も含む。

※【状態】は、「引かへし」などの仕立て方や「うそよごれたる」など衣服の状態を表す語を分類した。

※【飾り・素材】は、羽織の紐の描写や「桐の駒下駄」などの織物とは異なる素材を表す語を分類した。

五、使用語彙から見た特徴

服飾語彙を九項目に分類し、その様相をみていく。

① 衣裳の一般呼称

『好色一代男』（五〇例）

着物／きる物（着物） 19例・衣裳／衣装5例・衣類3例・薄衣／うすぎぬ3例・寝巻3例・衣2例・ふる着／古着2例
【以下一例】あか馴れし・産衣・塩馴衣・装束・墨染・洗濯物・たしなみ衣裳・旅衣・露分衣・時服・はや着物・葉分衣・不断着

《中期洒落本》（一三例）

着物／きもの7例・ねまき3例【以下一例】いしやう・つねぎ・衣

《後期洒落本》（二六例）

着物／着もの／きもの14例・ねまき4例・いしやう／いしよふ3例【以下一例】衣服・きがへ・道中着・床着・美服

この項目では、『好色一代男』五〇例、中期洒落本では一三例、後期洒落本では二六例の語彙が採録でき、語数に大きな変動がみられた。特に、『好色一代男』においては「衣」「衣裳」「衣類」などの一般呼称は多く使用され、時代が下ると共に減少傾向にある。

このように、『好色一代男』で多様な語彙が採録できたことの背景には、江戸時代初期の一般社会において「きるもの」という呼称に代表される、衣裳の一般呼称が定着しつつあったこと、その過渡期の段階であったことが関連しているのではないかと推測する。

この点、前田富祺氏は「衣服の総称は、^{〴〵}ころも^{〴〵}から^{〴〵}きぬ^{〴〵}、^{〴〵}きぬ^{〴〵}から^{〴〵}きるもの^{〴〵}へと変化している。また、近世で第一に使用されたのは^{〴〵}きるもの^{〴〵}である」と指摘している。^注近世初期の一般社会における衣服の総称、一般呼称に関する指摘で、言い換えれば、一般呼称が時代の流れとともに変化していることを述べるものである。

『好色一代男』から江戸中期・後期洒落本で見られた「衣」「衣裳」「衣類」の減少傾向は、その要因として社会一般の語彙の変化が背景として関与しているのではないかと考える。

この項目で最も延べ語数が多かったのは、「着物」である。『好色一代男』では「きるもの」、中期・後期洒落本では「きもの」と読み方に異なりはあるが、近世遊里文学において、「①衣裳の一般呼称」では「着物」が最も使用されていたといえるだろう。ただ、この「着物」には江戸初期から江戸後期にかけて語義変化があったのではないかと考えられる。『好色一代男』におい

て、「きる物」と表記された「着物」は、「①衣装の一般呼称」として用いられていたが、中には「白ぬめの着物」「黒茶宇のきる物」など、小袖の意味ともとれる用例が幾つか採録された。そして、『好色一代男』には「小袖」という語彙は一例もみられない。これは、安土桃山時代に表着として一般化したとされる小袖が、江戸初期では語彙としてまだ一般化しておらず、衣服総体をさす「きる物」が使用されていたと考えられるのではないか。

そして、「きる物」は中期洒落本において「きもの」へと変化している。江戸初期と江戸中期の間で「きるもの」は「きもの」に転じていったと考えられる。中期洒落本にみられる「きもの」は全て「①衣装の一般呼称」としての「着物」、つまりは衣服総体をさす語である。また、「②衣装の名称」に「小袖」という語彙が分類されていることから、江戸中期には「小袖」と「きるもの」は区別されるようになったともいえる。

後期洒落本においても「きもの」は一四例と多く使用されており、「①衣装の一般呼称」として用いられている。しかし、ここでまた語義の変化がうかがえる。『好色一代男』にみられたような「小袖」の意味ともとれる「着物」の例が採録された。「ねまきのきもの」や「着ものをさて帯をして」などは「小袖」の意味ととれるだろう。「小袖」を意味する「着物」は、後期洒落本の

中でも後半に刊行された二作品にみられ、江戸中期から後期にかけて定着した衣服の総称としての「きもの」が、江戸後期でまた、江戸初期の小袖と混同した「着物」に戻ったようである。

②衣装の名称

『好色一代男』(五八例)

羽織 8例・帷子 5例・袴／はかま 5例・むく 4例・肩衣 3例・布子 3例・肌着／はだ 3例・浴衣 3例・脇あけ 3例・袴 3例・袴帷子 2例【以下一例】うち懸け・うは着・裏付け袴・大ふり袖・紙子羽織・上下・かり衣・くさり帷子・十徳・染ぎぬ・千早・ときあけ物・長袴・肌帷子・はだつき・ひとつきる物

《中期洒落本》(一一三例)

羽織／羽折 27例・小袖 16例・下着／下々着 8例・襦袢／じゅばん 7例・無垢 7例・上着／上ハ着 6例・ふり袖 6例・かたびら 5例・ゆかた 5例・あゐ着／中着 4例・打かけ／うちかけ 4例・布子 3例・袴／はかま 3例・袴羽織／あはせばおり 2例・へりとりむく 2例・綿入羽織 2例【以下一例】あみじゅばん・袴・袴小袖・色あげ・かつば・ふとへ物

《後期洒落本》(一二九例)

羽織／はをり 25例・ふり袖 16例・小袖 16例・ゆかた 12例・ひ

とへもの6例・無垢／むく6例・上着／うは着／うはぎ4例・下着5例・襦袢／じゅばん4例／袖とめ／とめ袖／留袖

4例・袷／あわせ3例・布子3例・うちかけ2例・かたびら2例・どてら2例・はかま2例・ぱつち2例・ひとへばをり2例・ぶつさきばをり／ぶつさき2例・股引2例【以下一

例】袷襦袢・袷羽織・かいどり・合羽・上ミ下モ・かわはをり・長じゅばん・はんでん・わた入り羽織

この項目の延べ語数は、『好色一代男』では五八例、中期洒落本では一一三例、後期洒落本では一二九例と徐々に語数が増えている。「②衣装の名称」とは服飾語彙の中心であることから、語数の多さは、作品内での服飾描写の多さと判断される。近世遊里文学における服飾描写は徐々に増えていったものと推測できる。

「②衣装の名称」が増えていった過程はどうであったか。『好色一代男』の西鶴によってつくりあげられた詳細な服飾描写は、後の洒落本に影響を与えた。洒落本作者らは、西鶴の用法を参考に、通である服飾を描こうとして、細部にまでわたる服飾描写をおこなったと考えられる。これにより、中期洒落本における「②衣装の名称」は、語数が『好色一代男』の約二倍も採録されることとなった。この時期に登場したのが山東京伝である。

京伝は、男性のみならず、女性、遊女の描写にも多くの服飾語

彙を用いた。この女性の服飾描写によって、女性ならではの服飾語彙が洒落本にはみられるようになる。

中期洒落本における服飾描写の多くは男性のものであるが、採録した語彙の中に、「うちかけ」という女性の小袖の補助衣料がある。「うちかけ」は、『通言総籙』（三例）『古契三娼』（一例）の二作品に見られ、どちらも山東京伝の作品である。中期洒落本で女性の服飾語彙は、この京伝の作品のみであったが、後期洒落本では彼の作品以外にも女性の服飾語彙がみられた。主に、「ふりそで」である。後期洒落本において、「ふりそで」は「小袖」と同等の使用頻度がみられ、後期洒落本の特徴的な語彙の一つとなっている。「ふりそで」というのは服飾描写だけでなく、人物を指す語彙としても作中で使用されている。後期洒落本における「ふりそで」一六例の内、九例は振袖新造をさす語として用いられている。振袖新造とは、その名の通り振袖を着た新造のことであり、遊里を舞台とした洒落本に、新造が登場することは必然であるため、「ふりそで」の用例が多いといえる。

このように中期にみられた「②衣装の名称」の語彙に、さらに女性ならではの語彙が加わったわけであるから、中期から後期にかけて語数が増えたのだといえる。

以上が、浮世草子から後期洒落本にかけて「②衣装の名称」が

増加していったことの過程である。

この項目で最も多く採録できた語彙は、「羽織」である。最も多いとはいえ、『好色一代男』では八例、中期洒落本では二七例、後期洒落本では二五例と浮世草子と洒落本では語数に大きな差がある。これは、浮世草子の時代、つまりは江戸初期には女性の羽織は一般化していなかったことが挙げられる。『好色一代男』には、中期洒落本とは異なり、女性の服飾描写が多くみられる。男女に偏りなく服飾描写が施された『好色一代男』において、当時男性のみが使用したとされる「羽織」の例が洒落本と比べて大幅に少ないのは当然といえる。

③衣装の部分の名称

『好色一代男』（四三例）

袖22例・裾／すそ4例・裏3例・襟3例・袖口3例・袂2例・両袖2例【以下一例】腰・袂・広袖・股立ち

『中期洒落本』（四〇例）

衿／襟／ゑり7例・裏／うら6例・袖口6例・すそ5例・袖5例・袂／たもと2例・へり2例【以下一例】片袖・尻・胴うら・半袖・ひろ袖・ふところ・ゑり先

『後期洒落本』（五三例）

袖14例・ゑり10例・懐／ふところ8例・裾／すそ5例・裏ゑ

り2例・袖口2例・どう2例・へり2例・うら2例【以下一例】しり・つま・うしり三所・はし・むらぐら・はきかけ（すそまはし）

この項目は、『好色一代男』では四三例、中期洒落本では四〇例、後期洒落本では五三例と、作品ごとの語数に大きな差はみられなかった。③衣装の部分の名称の特徴は、服飾描写において「袖」「襟」の描写に用いられるのみでなく、登場人物の仕草・行動描写としても用いられている点である。この特徴は、本稿での対象作品すべてにみられるものである。

『好色一代男』における「袖」（二二例）と「袖口」（三例）の使用箇所には焦点をあててみると、服飾描写に使用されているのが五例、その他が二〇例であった。この結果により、『好色一代男』における「袖」は服飾描写にあまり使用されていないことがわかる。ほとんどが「逃げ入る袖をひかへて」などの登場人物の行動描写に用いられていた。

中期洒落本では、袖の語彙が多く採録でき、「袖口」「袖」「片袖」「半袖」「ひろ袖」を合わせると二一例になる。これは、『③衣装の部分の名称』の五二・五％と半数を占める。「袖口」のほとんどが、「白むくに浅黄のゑり袖口」のように服飾描写に用いられており、作者らが小袖の袖口という細部にまでわたる描写を意識

していたことがうかがえる。

後期洒落本では、「袖」が一四例と最も多い結果だった。使用箇所は、服飾描写に用いられているものが一例、言動や仕草に用いられたものが一三例であった。また、「袖口」は服飾描写に用いられていたものは二例であった。「袖」の多くは、袖をひく、袖で顔を隠すなどの登場人物の仕草に用いられており、「袖口」は小袖の袖口の服飾描写に用いられている。「袖」と「袖口」で使用箇所が異なる傾向にあると考えられる。

「袖」の次に多かったのは、「襟」(一〇例)である。「襟」の使用箇所は、服飾描写三例、言動描写七例であった。「襟」の使用箇所の特徴として、「襟に顔を半分うめる」という描写は多いことが挙げられる。この描写は三例みられ、それぞれ異なる作品から採録できた。いずれも女性の仕草に用いられている。また、言動に用いられた「袖」も八例が女性の仕草に用いられている。

以上から、「③衣装の部分の名称」は服飾描写よりも登場人物の仕草や言動描写に用いられることが多いといえ、その言動描写は主に女性に対して用いられる傾向にあると考えられる。当時の人々は、「袖」や「襟」という衣服の一部分を用いた仕草に女性らしさを表していた。浮世草子や洒落本における「③衣装の部分の名称」は、服飾描写のみならず、遊里の一風景として遊女らの

女性らしい仕草を表現する役割も果たしていたといえるだろう。

④服飾の色彩

ここでは、採録した語彙を伊原昭氏の『日本文学色彩用語語集成—近世—』(笠間書院 二〇〇六年)を参考に、伊原氏の定めた「赤」、「黄」、「緑」、「青」、「紫」、「黒」、「白」の七色を規準とし、新たに、「灰」、「茶」、「金」、「銀」「中間色」を加え、十二色で分類した。

『好色一代男』(六九例)

分類項目	色彩語	用例数	計
赤	緋	7	21
	紅(もみ)	5	
	赤	4	
	紅(くれない)	2	
	茜	1	
	紅梅	1	
	中紅	1	
黄	くちなし色	1	2
緑	卵色	1	1
	萌黄	1	
青	浅黄	4	11
	水色/水	3	
	かちん染め	2	
	花色	1	
	空色	1	
紫	紫/むらさき	4	6
	あやめ	1	
	藤色	1	
黒	黒	5	5
白	白	11	11
灰	鼠色	1	2
	薄鼠	1	
茶	茶	3	5
	かば	1	
金	桑染	1	1
	金	1	
中間色	ひはだ色	1	4
	との茶	1	
	紅うこん	1	
	あらひがき	1	

《中期洒落本》（九四例）

分類項目	服飾語彙	用例数	計
赤	緋／ひ	5	9
	紅	2	
	赤イ	1	
	せきちく	1	
黄緑	黄／黄色	3	3
	もへ黄	4	
青	浅黄	7	15
	花色	4	
	藍	2	
	紺／こん	2	
紫	藤色	2	4
	むらさき	2	
黒	黒／くろ	26	26
白	白	7	9
	しろじろと	2	
灰	鼠色／鼠	3	3
茶	茶色／茶	5	7
	飛／鳶	2	
銀	銀	1	1
中間色	御納戸茶	4	13
	こび茶／こぼちゃ	3	
	藍さび	2	
	青茶	1	
	かきいろ	1	
	黒鳶	1	
	洪染	1	

《後期洒落本》（九〇例）

分類項目	服飾語彙	用例数	計
赤	ひ	6	8
	なをりもみ	1	
	もみ	1	
緑	もへぎ	2	22
	藍／あい／相	9	
	紺／こん	7	
青	花色	6	8
	紫	8	
茶	とびいろ	3	4
	ちゃ	1	
黒	黒	21	22
	まつくろ	1	
白	白	7	7
銀	銀	2	2
中間色	こび茶	4	14
	藍さび／あいさび	2	
	栗むめ／くりむめ（栗梅）	2	
	あか鳶	1	
	御納戸茶	1	
	くわちゃ	1	
	こひなんど	1	
	のろまいろ	1	
	ひわちゃ	1	

最も語数の多かった色彩は、江戸初期が【赤】二一例、江戸中期が【黒】二六例、江戸後期が【青】【黒】二二例という結果だった。

江戸初期は【赤】などの明るい原色が好まれ、江戸中期では大きく変わって【黒】が流行、江戸後期では【黒】を好む風潮が残しつつもそれと同等に【青】も好まれたといえる。

当時の時代背景と照らし合わせると、【赤】は、江戸初期のまだ改革によって制限されていない自由な風潮を表しており、江戸中期の【黒】は儉約政治によって贅沢を良しとしなかった時代を風刺し、江戸後期の【黒】と【青】は、質素儉約の中で生まれた新たな美意識を表しているようである。大平雅美氏は、洒落本における男性服飾は、黒から青に変化していったと指摘しており、本稿の調査結果からもその傾向がみられた。

また、服飾色彩の中には、初期・中期・後期を経て作品に用いられなくなった語彙があった。本稿で取り上げたいのは【青】に分類される「浅黄」である。

「浅黄」は、『好色一代男』に四例、中期洒落本に七例、後期洒落本では〇例という結果であった。初期と中期では、「浅黄」は【青】で最も語数が多かった。しかし、後期になると「浅黄」は姿を消し、代わりに「藍」「紺」「花色」が多く使用されている。

初期と中期では、【青】の中でも「浅黄」は流行色とされているが、後期では【青】の用例が多いにもかかわらず、それまでの【青】の代表色であった「浅黄」はみられなくなったのである。

よって、本稿では、後期では【青】が最も多いが、【青】の中でも、初期・中期・後期では語彙の様相に変化がみられ、一概に【青】といっても、後期において「浅黄」は好まれていなかったといえるだろう。

以上、「④服飾の色彩」は当時の風潮を反映しやすいことができる。つまり、服飾色彩の変化は、時代背景と密接に関係しているといえる。また、初期・中期・後期と語彙の様相に大きな変化があったことから、当時の人々は風潮によって服の色を変えており、これは人々の色彩への関心度の高さを表しているといえるだろう。

⑤服飾の文様・図柄

『好色一代男』（四〇例）

鹿子紋／かのこ6例・縞4例・小紋2例・しぼり2例・瞿麦／なでしこ2例・紋所2例・りきん縞2例・ちらし形／ちらし2例【以下一例】青海浪・おもひ葉・数紋・きり付け・後室模様・笹屋縞・三番雙の縫紋・注連縄・十六形・立縞・羽子板・はね・破摩弓・本奥縞・物鹿子・紋。浴衣染・ゆづり葉

《中期洒落本》（七三例）

嶋／縞／しま21例・小紋7例・三ツ紋4例・紋所4例・無地3例・五ツ紋2例・くじやくしぼり2例・さらさ2例・ぼたん2例・紋2例・若松2例【以下一例】鬼ざらさ・かきつばた・かすみ・小もよう・さかな・さくら川・しのお摺・嶋かりんとう・鷹・だてもん・立横縞・丁子・仲藏嶋・花ごうし・花たてわき・二ツ紋・むきみしぼり・もぐさ嶋・よこ縞・らせんしぼり・呂の山まひ染・きし縞

《後期洒落本》（四五例）

嶋／しま／じま8例・小紋5例・紋所／もん所5例・あづまもやう／あつまもやう2例・無地／むぢ2例【以下一例】あら磯・梅のもよふ・あほち桐・鹿子・かんとうじま・き・やう・格子・しぐれ小もん・しぼり・中がた小紋・とぼせしぼり・なるみしぼり・なんぶ嶋・花もうせん・ひし小紋・額むく・二ツ薦・ふた葉あふひ・星縫・紋・らせん絞り・利久小もん・ぢもん

この項目の延べ語数は、『好色一代男』で四〇例、中期洒落本で七三例、後期洒落本で四五例であった。初期・中期・後期で語数に大きな変化がみられる。

中期洒落本では、通を描こうという作者の意識が、細部にまで

わたる服飾描写としてあらわれ、文様を表す語彙が多く採録できた。しかし、後期洒落本では、洒落本が徐々に人情本へ移行していったように、通を描こうという意識が失われつつあった。これにより文様にまでわたる服飾描写が減ったのだと推測する。

『好色一代男』に多くみられる「鹿の子」が最も多く使用されている服飾は、小袖であった。鹿の子は非常に高価な文様であるとされている。高級織物が出回り、質素儉約の風潮もなかった江戸初期において鹿子紋は流行し、『好色一代男』においても、「鹿の子」が多く取り入れられる結果となったと考えられる。

中期洒落本では、「嶋／縞／しま」(二一例)が最も多い。本稿の調査対象作品内で、服飾描写としての「縞」の使用箇所注目したところ、【小袖】九例、【帯】四例、【羽織】二例、【装身具類】二例、【袴】一例、【衣装の部分】一例であった。多く「縞」は【小袖】に使用されているが、「風呂敷」「菅笠のひも」などの装身具類にも使用されている。当時の人々は服飾に幅広く「縞」を使用していたといえるだろう。

次に多いのは、「小紋」(七例)である。「小紋」の使用箇所は、【小袖】五例(内「ある着／中着」二例・「上着」一例)、【羽織】二例であった。対象作品では、「小紋」が使用されていたのは、男性の服飾描写のみであった。

「縞」「小紋」の延べ語数が多いことの要因は、中期洒落本には、質素儉約という当時の風潮が反映されていたと考えられる。『江戸服飾史』^{注8}によると、儉約政治の影響で目につくような大模様が排除されて小紋が流行したものとされており、本稿の調査結果からも、服飾語彙は当時の風潮の影響をうけやすいことがわかる。

後期洒落本も中期同様、「縞」「小紋」の用例数が多い。「縞」類(「縞」「かんとうじま」「なんぶ嶋」)、「小紋」類(「小紋」「しぐれ小もん」「中がた小紋」「ひし小紋」「利久こもん」)の使用箇所についてみていきたい。

「縞」類の使用箇所では、【小袖】八例、【装身具類】二例であった。本稿の調査対象作品では、「縞」は羽織に用いられておらず、主に小袖に用いられている。なお、「縞」が使用された【装身具類】は「帯」と「前だれ」であった。次に、「小紋」類は、【小袖】四例、【上着】四例、【装身具類】一例であった。「小紋」は、小袖だけでなく羽織にも使用されている点が特徴である。

以上から、後期洒落本における文様の使用箇所は、「小袖」が最も多く、中期洒落本とは異なり【装身具類】に用いられることは少ないことがわかった。

⑥織物の名称・材質

『好色一代男』（五六例）

襦子／じゅす 8例・縮緬6例・木綿／もめん 5例・綸子4例・麻衣／あさ 2例・唐織／から織 2例・絹／きぬ 2例・茶字縞／茶字 2例・八丈 2例【以下一例】あつち織・あやけん・今織・運斎織・越後晒・勝間木綿・絹縮・きぬ物・ごろふくれん・さき織・しゅちん・すずし・朝鮮さや・紬・どし・とびさや・緞子・ぬめ・八端懸・日野・天鷲絨・ふと布・まがひ織

《中期洒落本》（八七例）

縮緬／ちりめん 15例・八丈 9例・羽二重 6例・紬／つむぎ 5例・な、こ／七子 5例・上田／うへだ 4例・琥珀／小伯 4例・麻／あさ 3例・郡内 3例・びろうど 3例・海黄 3例・沙綾／ざや 2例・さらし 2例・襦子 2例・丹後 2例・どんす 2例・八端がけ／八反掛 2例・太織 2例・羅紗 2例【以下一例】越後縮・き木綿・さらさ・棧留・秩父絹・ちゞみ・布子・ぬめ・もめん・ゆうき・ゆふもん

《後期洒落本》（九九例）

ちりめん／めんちり／ちり 24例・びろうど 8例・上田／植田／うへだ 5例・八丈 5例・じゅす 4例・どんす 4例・な、

こ 4例・木綿／もめん 4例・絹／ろ 3例・壁チヨロ／カベチヨロ 2例・きぬ 2例・ぐんない／ぐん内 2例・こはく 2例・ちゞみ 2例・つむぎ 2例・はかた 2例・羽二重 2例・ふとり 2例・ゑちこ 2例・ねり 2例【以下一例】唐ちりめん・ゴロフクレン・さや・上州ちりめん・上州八丈・たんご・ち、ぶきぬ・半ざらし・本八・ゆうき・ゆふきつむぎ・りふもん・ならざらし・ゆうきもめん・もをる・さんとめ

この項目で最も延べ語数が多いのは、『好色一代男』では「襦子」（八例）、中期洒落本では「縮緬」（二五例）、後期洒落本「縮緬」（二四例）である。

「襦子」は、地が厚く光沢があり、艶美くらべるものがないほどである^{注9}と評されるように、華美な織物である。中期・後期洒落本では、帯地に使用される描写が多かった。しかし、『好色一代男』では「中にはかば襦子」「上には白襦子」「白襦子の衿」など小袖での使用例がいくつみられた。この例からも、『好色一代男』が刊行された江戸初期は、華美な織物が、帯地などの衣装の一部に使用されるだけでなく、小袖などの衣装の大部分にも用いられていたことがうかがえる。これは、質素儉約の風潮がまだなかった江戸初期の傾向であるといえる。

後期洒落本において、「縮緬」の次に用例数が多かったのは、

「びろうど」(八例)である。「びろうど」の使用箇所をみてみると、【小袖】四例、【上着】二例、【装身具類】二例という結果だった。「びろうど」の使用箇所の特徴として、「織物」だけでなく「色彩語」としても使用されている点が挙げられる。

用例①

髪ばかり、りつぱにゆひ、をしろいべたと付、あいびろうどのよごれた布子を着たなり

〔傾城買四十八手〕(二二―五)

用例②

是も前方は女郎あがりと見へて言葉がらおりまじり。相びろうどのふとりの小袖にくろはんゑり幅広にかけ少しぬきゑもんにしてわく火ばちにかゝり…

〔大通契語〕(一四六―下一〇)

用例①は、新造の服飾描写である。「あいびろうど」は本文の注釈によると、「黒みがかった緑^{注10}」であるとされている。そもそも「びろうど」は、織物をさす。しかし、この用例①では、「びろうど」は色彩語として用いられている。「布子」が木綿の着物であるため、「布子」に「びろうど」が織物として使用されているとは考え難い。よって、用例①は、「黒みがかった緑色の木綿の着物」と解釈できる。用例②も同様に、「ふとり」は「太織」

という織物を意味し、織物としての「びろうど」と併用されている可能性は低いといえよう。

また、このような色彩語としての「びろうど」^{注11}は、全て「あいびろうど」と表記されているのが特徴だ。本稿で採録された「あいびろうど」(六例)の用例全てが色彩語である。

反対に、「びろうど」と表記される場合は、織物を意味しているとみられる。

⑦装身具類の名称

採録した語彙を【被り物】【帯】【履物】に分類して考察する。この三項目に分類できなかったもの(簪や鉢巻)については用例数には含むが、表には記載しない。

『好色一代男』（二〇六例）

履物	下駄	3	24
	雪駄	3	
	草履	3	
	足袋／革踏／足踏	3	
	塗下駄	2	
	引下駄	2	
	畦足袋	1	
	上ばき	1	
	かず雪駄	1	
	高崎足袋	1	
	中ぬき	1	
	袋足袋	1	
	藁草履	1	
	草鞋（わらんづ）	1	

被り物	編笠／あみ笠	6	26
	置綿／置わた	3	
	菅笠	2	
	頭巾	2	
	投頭巾	2	
	綿帽子／綿ぼうし	2	
	烏帽子	1	
	大綿帽子	1	
	笠	1	
	冠	1	
	きどく頭巾	1	
	つづら笠	1	
帯	塗笠	1	52
	檜笠	1	
	目せき編笠	1	
	帯	24	
	脚布	8	
	下帯	5	
	二の物／二布	3	
	ふとし／犢鼻褌	3	
	二つわり	2	
	懸帯	1	
	隠し道具	1	
	組帯	1	
	腰絹	1	
	腰より下の一重	1	
	中幅	1	
	幅広	1	

『中期洒落本』（二〇四例）

被り物	かつぎ	1	8
	頭巾	1	
	すげのふかき笠	1	
	竹の子笠	1	
	ふか笠	1	
	ふろしき頭巾	1	
	ほうかふり	1	
	羽かぶりのきめ頭巾	1	
帯	帯	31	45
	ひらぐけ	3	
	ほそ帯	3	
	しごき	2	
	下帯	2	
	ふんどし	2	
	まへおび	1	
	羅帯	1	
履物	うはぞうり／上艸履	4	19
	下駄	3	
	ぞうり	3	
	駒下駄	2	
	雪駄	2	
	桐のまさ下駄	1	
	中をりの駒下駄	1	
	はき物	1	
	ひより下駄	1	
	安下駄	1	

『後期洒落本』（二〇六例）

被り物	頭巾	7	24
	笠	3	
	すげ笠	3	
	かつぎ／かつぎ	2	
	袖頭巾	2	
	やまをか頭巾	2	
	頭のうへ	1	
	頭のもの	1	
	あみ笠	1	
	宗十郎頭巾	1	
	ほうかむり	1	
帯	帯	24	29
	下帯	1	
	下緒（したひも）	1	
	ちうや帯	1	
	ふんどし	1	
	まへ帯	1	
	はきもの	5	
履物	草履	4	32
	足袋	4	
	うわ草履／うはぞうり	3	
	下駄	3	
	ひより下駄	3	
	駒下駄	2	
	雪駄	1	
	あしだ	1	
	くつたび	1	
	なかぬき草履	1	
	中の町ぞうり	1	
	はなをのうらつけ	1	
	半くつ	1	
	わら草履	1	

【被り物】の延べ語数は、『好色一代男』では二六例、中期洒落本では二四例、後期洒落本では八例という結果であった。これについては、人々が【被り物】を使用しなくなったという時代風潮が関係していたのではないかと推測する。

例えば、初期の『好色一代男』では、「編笠」の例が多く見られる。これは「編笠をまぶかに冠^{注12}つて遊里へ通つていた」という当時の風習によるものであろう。遊里へ通うために顔を隠す目的で【被り物】は使用されていたのである。

では、同じく遊里を舞台としている洒落本に、【被り物】の例が少ないのは何故だろうか。登場人物の服飾描写に通を尽くしたとされる洒落本に、【被り物】の描写がされなかったとは考え難い。むしろ、中期・後期になるにつれ、遊里へ通う者が、【被り物】を身に着けていなかったことが考えられるのではないだろうか。

洒落本では、【被り物】に代わり、髪型の描写が多く見られる。これは、当時の通が遊里へ通う際に、【被り物】を被っていないかったことを示唆している。よって、初期から後期にかけて【被り物】の語数が減少していったものと考えられるだろう。

【帯】についてみていきたい。延べ語数は、『好色一代男』では五二例、中期洒落本では二九例、後期洒落本では四五例であった。

『好色一代男』では、「帯」の他にも「脚布」「二布」などの女性の腰巻を表す語彙が多く採録された。これは、中期・後期洒落本には見られない特徴で、腰巻についても「脚布」「二布」「腰より下の一重」「隠し道具」など様々な表現がみられる。また、『好色一代男』では、男女問わず帯の描写がみられた。

中期洒落本では、「帯」が二四例であり、他の五例は用例数が一語のみであった。また、中期洒落本には、女性の腰巻を表す「脚布」などの語彙はほとんどみられない。この結果から、中期洒落本は、男性の服飾描写に重点を置いていた傾向がうかがえる。

後期洒落本では、「帯」が三二例と大部分を占めている。「帯」の他には、「ひらぐけ」(三例)「ほそ帯」(三例)の例もみられる。帯は、初期から中期にかけて帯幅が広がり装飾性をもつようになつたとされているが、後期洒落本には、「ひらぐけ」「ほそ帯」などの細い帯の使用がみられた。

また、後期洒落本における帯描写は、男性一一例、女性一六例と女性の方が多い。中期洒落本ではほとんどみられなかった女性の服飾描写が、この後期洒落本の【帯】の項目では確認できる。後期洒落本には、女性の服飾描写が存在することを示唆している。

以上、初期から後期にかけて【帯】についてみてきたが、【帯】は服飾描写に限って使用されるのではない。「帯をとく」や「帯

の間に物をはさむ」などの登場人物の行動にも用いられ、行動描写による「帯」の使用は、初期・中期・後期すべてにみられる。

「⑦装身具類の名称」において、【帯】の延べ語数が最も多いのは、服飾描写のみならず、行動描写にも多く用いられていたことによるといえるよう。

【履物】について、『好色一代男』では二四例、中期洒落本で三二例、後期洒落本で一九例採録された。【履物】の中に「足袋」も分類したが、登場人物の服飾描写に用いられる傾向がみられた。「江戸時代に主に使用された履物は、草履、下駄、草鞋である」との指摘があるが、「草鞋」は、『好色一代男』で一例みられたのみである。よって、遊里においては【下駄】【草履】が主流であったと推測できる。

また、中期・後期洒落本になると、「上草履」が採録される。「上草履」は、屋内で履く草履で、洒落本内では、遊女の履物として使用されている。例えば遊女が座敷に上がる際に、草履を脱いだり、履いたりする行動描写にみられるのである。「上草履」は遊里を舞台とした洒落本ならではの語彙といえよう。

「上草履」の例からもわかるように、【履物】もまた、【帯】と同様、行動描写にも多く用いられていた。

以上から、装身具は登場人物の衣装を彩る役割を果たすだけで

なく、登場人物の行動を鮮明に描写する役割を担っていると言える。

「⑦装身具類の名称」は、どの作品にも多く使用される語彙である。これは、「編笠」を被って遊里に通う男、「帯」を締め直す男、座敷に上がる際に「上草履」をぬぐ遊女など、遊里での一風景の描写にも、「⑦装身具類の名称」は、浮世草子・洒落本において欠かすことのできない語彙であったといえるだろう。

六、近世遊里の服飾語彙の変遷

浮世草子と中期洒落本、後期洒落本に見られる服飾語彙から、近世遊里文学における服飾語彙の様相についてみてきた。江戸初期から後期にかけて、人々の衣装の基本は小袖と帯であり、流行が反映されたのは、それらを装飾する「色彩」「文様」「織物」であった。

浮世草子と洒落本の作者らは、作品の舞台であり、流行の発信地でもある遊里を少なからず意識して、当時流行していた服飾を作品内に取り入れようとしたと考えられる。江戸初期から後期にかけて採録した語彙の変化からも、服飾語彙は社会の変化を大きく反映した形で表されているともいえる。

また、服飾語彙の様相を考察していくうちに、新たに見えてく

るものがあつた。それは、服飾語彙が作品に与えた影響、効果である。

江戸初期に刊行された『好色一代男』には、西鶴のつくりあげた登場人物の詳細な服飾描写がみられた。以下に例を挙げる。

(傍線は稿者)

下には水鹿子の白むく、上にはむらさきしほりに青海浪、紋所は銀にてほの字切りぬかせ、五つ所のひかり、帯はむらさきのつれ左巻、結びめ後に、紺目のすみに鉛のしづ入れ、髪は水引懸けて、黒襦子のきどく頭巾、まづは首すぢの白き事、木地のつづら笠にしろき紐を上にもすばず、足踏は白襦子に紅を付け、ぼたん掛けにして、ばら緒の藁草履はきつれて、二十四五人、同じ年頃、同じ風俗、供の女も男もはるかにさがりゆく。

(二二五—三)

右に挙げたように、西鶴は、登場人物の衣装一つ一つを丁寧に描写する手法を採っている。

例えば、女性に対して、衣装の一つ一つを書き連ねる。読者は、その服飾描写により、女性の姿をより鮮明にイメージすることができるのである。また、一人の女性に服飾語彙を多く用いることは、その女性が詳細な服飾描写をするに値する魅力的な女性であると、読者に感じ取らせる効果があるとも捉えられる。

西鶴が細かな服飾描写を行ったのは、女性に対してだけではない。

あらひがきの袷帷子に、ふと布の花色羽織に、さし渡し四寸五分計の紋に鎌と輪とぬの字を付て、文盲なる出立、「わが身ながらこれは醜ひ物」といふ。

(二五五—六)

右は、色男の世之介が野暮な衣装を着る場面である。あえて詳細な服飾描写を用いることで、完璧なまでに野暮な客を演じてみせた世之介という人物の人物の手柄をも表現している。

中期洒落本では、浮世草子にみられた服飾描写とは別の影響、効果がみられる。例えば、洒落本では、西鶴によってつくりあげられた用法を真似たかのような、登場人物の詳細な服飾描写が多く見られる。

もっとも、それらは西鶴の人物の性格や手柄までを理解させようとした服飾描写とは異なるようである。中期洒落本にみられる服飾描写の多くは、男性の服飾に対してのみに限られている。これは、洒落本が、遊里における客と遊女との一昼夜の遊興を描いた作品であるためと考えられ、性質上、人物の手柄や性格の描写は不要で、むしろ「通」の型である服飾を描写することに重点が置かれたと考えられるのである。

言い換えれば、中期洒落本に見られる服飾描写の「通」描写

は、「通」という型の、服飾を描写したにすぎず、西鶴の服飾描写のような、人柄をも感じ取らせるような服飾描写ではないといえよう。

洒落本は、中期後半に登場した山東京伝によって、さらに変革を迎える。京伝による変革とは、女性の服飾描写である。中期洒落本の多くは、通を描こうとして、男性の服飾描写に偏っており、女性の詳細な服飾描写は多く見られない。そんな中、女性に詳細な服飾描写を施したのが山東京伝である。中期洒落本八作品で女性の服飾描写がみられたのは京伝作の二作品のみであった。京伝は、女性にも詳細な服飾描写を施すことで登場人物に命を吹き込んだといえる。洒落本は、男女にスポーツが当てられるようになり、一昼夜の遊興に止まらず、男女の人情を描くようになった。男女の関係に焦点が当てられるようになった洒落本は、通を描こうという意識が薄れ、男女の真情を描く人情本へと移行していった。

洒落本は、服飾語彙の様相という観点からみれば、当時の流行を忠実に取り込んでおり、当時の人々にとっては間違いなく通の指南本であった。初期の西鶴による登場人物の人柄を服飾描写で表現する描写法は、中期にはみられず、後期にその要素をみるこ

とができた。『好色一代男』にみられた女性の細かな服飾描写が、江戸中期後半の京伝によって、再び用いられたのである。京伝は、西鶴の描写を意識していたといえる。

注

注1 彦坂佳宣「洒落本の語彙」〔講座日本語の語彙5 近世の語彙〕（明治書院 一九八二年）

注2 小池三枝「洒落本の衣裳付け」〔国語と国文学〕第六六卷十一号 東

京大学国語国文学会 一九八九年）

注3 暉峻康隆『西鶴 評論と研究 上』（中央公論新社 一九五三年）一八九頁より引用。

注4 大平雅美「洒落本における男性服飾——「黒」から「青」への色彩変化——」〔国際服飾学会誌〕（国際服飾学会 二〇〇八年）「I. はじめ」により引用。

注5 藤本箕山『色道大鏡』（續燕石十種 第三卷）（中央公論新社 一九八〇年）

注6 前田富祺「衣の生活語彙史」〔言語生活〕三一四号十一月号 一九七七年）参照。

注7 注4に同じ。「V. まとめ」に、「洒落本における男性服飾の考察をまとめると、江戸後期に開花した町人文化の「いき」と呼ばれる色の発展は、寛政の改革後に始まったと推定される。その色彩は富裕町人の好んだ「黒」から江戸市井の色「青」への大きな変化であ

る。」との記述がみられる。

注8 金沢康隆『江戸服飾史』（青蛙房 一九六二年）三二九頁の内容を要約し、引用した。

注9 注8に同じ。一一九頁参照。

注10 菊地ひと美『江戸衣装図鑑』（東京堂出版 二〇一一年）一六七頁参照。「オランダ・中国に産し、日本では慶長か正保あたりの江戸初期から織り始められました。光沢と質感が天鷲の羽毛に似ている帯地」とある。

注11 伊原昭『日本文学色彩用語集成―近世―』（笠間書院 二〇〇六年）二九七頁参照。伊原昭氏も、「びろうど」は色彩語として記載されており、当時の人々は「びろうど」を「織物」のみでなく「色彩語」としても使用していたといえる。

注12 注8に同じ。三〇三頁参照。

注13 注10に同じ。三二四頁参照。

（ほりい あやか 二〇一五年日文卒）